

子規會誌

一二七号

平成一十二年
十月

第一〇九回 子規忌法要 一

松山中学校の外人英語教師の来歴 三好恭治 二

明治時代松山の子規関係史料断片 柚山俊夫 一三

愚陀佛庵の時期における子規、漱石の転機（上） 和田克司 二二

例会記録

○平成二二年七月例会(第八一〇回)

七月一九日(月) 正宗寺本堂 出席者 三〇名

講演「松山中学校と同志社・アメリカンボード」

外人英語教師の来歴

常任理事 三好 恭治氏

從來全く忘れられていた、夏目漱石以前に、松山中学校英語教師として赴任した四人の外人教師についての研究である。また彼らを日本に派遣したアメリカンボードについても紹介された。(本号に掲載)

○平成二二年八月例会(第八一一回)

八月一九日(木) 正宗寺本堂 出席者 三〇名

講演「碧梧桐と虚子の間」

常任理事 平岡 英氏

碧梧桐の「温泉百句」を巡っての虚子との論争、「三千里」の旅に際して伊予路における新傾向俳句の普及活動、碧梧桐晩年になつての新傾向俳句の行き詰まりの過程から、碧梧桐と虚子の関係をたどる。これらから考察すると、両者が常に対立関係にあつたというのは誤りで、共に子規の後継者として、よく親しみ合い、切磋琢磨し合った間柄であつた。(次号掲載の予定)

○平成二二年九月例会(第八一二回)

九月一九日(日) 正宗寺本堂 出席者 四〇名

講演「ホトトギス」が生んだ

江戸文学コレクター 忍頂寺 務伝

日本女子大学教授・本会理事 福田 安典氏

近世歌謡、洒落本を中心とした江戸文学のコレクターとして知られる忍頂寺(にんじょうじ) 務は、「ホトトギス」によつて江戸文学研究に導かれた。明治二五〜三三年にかけて、正岡子規や内藤鳴雪らによる蕪村句の輪読がおこなわれ、その内容が「ホトトギス」に掲載された。明治三二年洲本中学校に入学した忍頂寺務は、「ホトトギス」を講読し、古典研究に熟中する。

洲本中学校に「白雪会」という結社を作り、「猿蓑集」の研究をし、「ホトトギス」から子規、虚子、碧梧桐、鳴雪らに親しみを覚えていたという。やがて寒川鼠骨を中心とした其角の「五元集」の輪読が始まり、「ホトトギス」に連載される。こうして江戸文学研究を志すようになった忍頂寺は、三田村篤魚を中心とする江戸文学輪読会に参加するようになる。「ホトトギス」の影響下に育つた江戸文学研究家、収集家忍頂寺務は、正岡子規の生んだ鬼子とも云うべき教え子と言えるのではないか。

例会案内(予定)

○一二月例会 平成二二年一月一九日(金) 正宗寺本堂
講演「常盤会寄宿舎」創設の頃」 宇都宮良治氏

○一二月例会 平成二二年二月一九日(日) 正宗寺本堂
講演「子規の見た日光」 今井 道子氏

○一月例会 平成二三年一月一九日(水) 石手公民館
新年懇親会

会長年頭挨拶「平成二十三年の松山子規会」
新年祝吟・居合演武ほか

第一〇九回 子規忌法要・物故会員法要

墓前祭 子規埋髮塔前
 本法要 正宗寺本堂

司会 常任理事 宇和 宣氏

法要読経 正宗寺法務統括住職 田中 義雲師

子規遺作朗詠 短歌「あづま菊」 武田 峰松氏

吟道明教館総本部副会長・本学会員 森 慎吾氏

献句披講 理事 佐伯 徹也様

焼香 正岡家ご遺族 平松 丑雄様

松山子規会会長 井手 康夫氏ほか有志各位

閉会あいさつ 会長 井手 康夫氏

献詠

絶筆の朗詠沁みる子規忌かな 土居 桂子
 大いなる遺産畏む瀬祭忌 熊野 伸二
 夕顔をいつくしまれし子規のこと 和田カズ子
 食す四季聞ゆるやうな瀬祭忌 高野 昌理
 糸瓜忌や献句たづさへ正宗寺 山岡 麦舟
 子規の忌や若さが宙の球を捕る 白石 允枝
 ゴールデンゴールズ来りて
 欽ちゃんのチーム熱戦子規の里 西本 加代
 俳縁に連らなる幸や瀬祭忌 宇高 孝子
 帰郷してなほ近づきし子規忌かな 豊田喜久子
 法師蟬仰臥漫録読み終えし 才上 宏子

丘に立ち雲を見すれば子規忌かな 田中 紫春
 よこたはり子規の目となる瀬祭忌 まさる
 鉄叩く漢の腕瀬祭忌 浅海 好美
 絲瓜忌や男は鉄の掌をもちて 浅海 好美
 今日と謂うひと日大事に子規祀る 岩崎 美世
 花は葉に遺す言葉のなかりけり 渡部 福王
 蜘蛛の罫の揺れて始まる修羅場かな 片岡 寿子
 秋灯下未完の一句記しおく 本郷 和子
 八月の街灼け人間の螺子きしむ 多和 圭三
 ふるさとの目を刺す緑心まで 多和 圭三
 熱風に山も怒れる緑かな 多和 圭三
 突起物強き緑に包まれり 乃万美奈子
 ルーマニアから俳人迎え瀬祭忌

子規忌法要供物御礼

御供物料 内藤世南 四女 四本和佳子様
 温泉煎餅 玉 泉 堂様
 お菓子 竹田 美喜様
 子規句めぐり 子規博友の会様
 鶏頭・糸瓜 和田カズ子様
 柿・蜜柑 風本 幸子様
 お酒 浅海 好美様
 宇和 宣様

松山中学校の外人英語教師の来歴

三好 恭 治

一、はじめに

平成二二年(2010)七月、松山城南山裾に在る萬翠莊(愛媛県美術館分館)上手の「愚陀仏庵」が土砂崩れで倒壊した。松山市民はもとより、全国各地の子規・漱石ファンや司馬遼太郎の『坂の上の雲』を一度でも手にした読者は衝撃を受けたに違いあるまい。

愚陀仏庵は明治二八年夏目金之助(漱石)が松山中学校(愛媛県尋常中学校)の英語教師として赴任時の寄宿先であり、正岡子規と五二日間の共同生活したことも著名である。もう一つ、萬翠莊から「坂の上の雲ミュージアム」に下る道筋に「愛松亭」跡があり、漱石が松山に着任直後に「木戸屋旅館」から移った最初の止宿先である。愛松亭には漱石の前任カメロン・ジョンソン(アメリカンボード派遣宣教師)が住んでいた。松山中学校にはジョンソンを含めて四名の外人教師が勤務したが、今日では完全に忘れられた存在であるので、外人英語講師の招聘から漱石の赴任ま

での来歴を取り纏めた。

(注) 本小論では学校名を「松山中学校」と記述するが、厳密には「愛媛県松山中学校」(明治一一年六月—一七年五月)、「愛媛県立第一中学校」(二七年五月—二〇年五月)、「伊予尋常中学校」(二二年九月—二五年四月)、「愛媛県尋常中学校」(二五年五月—三三年三月)、「愛媛県立松山中学校」(三二年四月—昭和二三年三月)以下略である。

二、松山における英学の嚆矢

松山藩の近代教育(具体的には英学教育)の始まりを特定することはきわめて困難である。通説では、明治八(1875)年創設の愛媛県英学校から始まるとされるが、明治元年松山藩校明教館に「洋学場」が開設時から松山の英学は誕生したとすべきである。

明治元年・二年 松山藩校明教館大改革

明治元(1868)年十月五日(新曆十一月二十三日)松山藩は藩政改革を断行し、「職制」は、執政局(監察・寺社・民生)、会計局(出納・郡政)、文武並軍務局、刑法院、広間所、内政所の四局二所となった。文武並軍務局の下部機構には、習文場・国学場・洋学場・医学場・操練場・主船場・兵器場・厩司等の諸課を設け、教育近代化に踏み出した。

翌二年二月、再度改革があり、為政局・総教局・会計局・軍務局・広間所・内家局・公儀局の六局一所を設置、教育については総教局が所管し、その下に皇学所・漢学所・洋学所・医学所などの教育機関が配置され、教育と軍務が完全に分離された。洋学所には洋学司教(四等官百二十石、中士の下)として小林小太郎が任命された。(注)小林小太郎が文部省に提出した履歴書では明治元年に松山藩洋学司教を拝命している。

小林小太郎 「松山藩洋学司教」 拝命

小林小太郎は藩命で万延元(1860)年から文久(1862)年までの三年間イギリス大使館(江戸東禅寺内)に留学、慶応義塾、幕府開成所(教授方手伝)を経て明治元年松山藩洋学司教を拝命。明治二年大学(旧昌平黉)

助教を経て欧州に教育事情査察の後、文部省に出仕、のちに報告(翻訳)局長、東京大学予備門長(第一高等学校校長)となる。明治十八(1885)年子規は大学予備門の学年末試験で不合格落第となったが、当時の東京大学予備門長が小林小太郎であった。

明治二(三年)、藩校明教館・藩洋学所から大学南校(東京大学前身)への進学者に、葉丸幹二郎(貢進舎給費生。内藤素行実弟)、吉田達三郎(貢進舎給費生)、押川熊三郎(松山藩給費生。キリスト者。東北学院創始者。代議士。押川春浪の父)、佐伯陽一郎(松山藩給費生。工務省。木曾川大改修担当技師)、佐伯敦崇(松山藩給費生。動物学者。『中学動物学』著)、宮原六郎、小林文吾らがいる。

押川熊三郎(方義)は藩校明教館に二一年間就学(1856-1863)中、教化を受けた教授として武知愛山(幾右衛門)、河東静溪(喜一郎)、小林小太郎の三教授の名を自筆履歴書のなかで挙げてゐる。上記の学生も同様に小林小太郎から直接英学教授をうけたと考えられる。

(注)貢進舎給費生は、明治三(1870)年七月二七日太政官布告により、各藩は石高に応じ一名から3名の人材を大学南校に貢進することが命じられ選抜された学生。貢進生の総数は三二八名で、年齢は一六歳から二〇歳(例外あり)。愛媛県資料では給費生の名簿はあるが、選抜基準等の詳細は不明である。

給費生からは鳩山和夫（東大教授、早稲田大学学長、衆議院議長）・小村寿太郎（外務大臣。ポーツマス会議の日本全権大使）・穂積陳重（宇和島藩出身。東大法学部長。英吉利法律学校（中央大学）創立者の一人。枢密院議長。穂積三兄弟の一人（兄・重頼は第一国立銀行頭取、弟・八束は東大法科大学長）・杉浦重剛（東京予備門長、昭和天皇御進講役。小林小太郎が杉浦の後任予備門長）ら明治を支えた人材が輩出している。

松山藩の藩政改革、学制改革着手

明治三年、明治新政府の指達により、全国統一の施政を実施することとなり、学制改革は権少参事である内藤素行が当り、県教育行政の執行責任者として大錠を振るうことになる。この措置により、大原観山、河東静溪、近藤元脩らが退任させられ、観山は家塾、静溪は千船学舎、元脩は謙塾を開いて子弟（子規を含む）を教えた。内藤素行が「鳴雪自叙伝」の中で以下のように述べている。

明治三年の機構改革で、大参事（菅良弼、鈴木垂遠）、権少参事（山本忠影と菅伝）、少参事（小林信近、長屋忠明）、権少参事（野中久徴、東条〇〇、内藤素行）となり、「小林は会計、長屋は治農、野中は刑法、東条は軍務、私（内藤）は学校を引受け事になったので、藩の学政は思ふ存分に改革する機会を得た。」

「学科は普通科、皇典科、洋典科、医療科、算数科と云ふを置いて、其普通科が実は漢学を主として日本の在来の漢籍や其他西洋の翻訳書等を教授させたのである。」「洋典科は藩地では人を得られぬので、其頃は慶応義塾が多く洋学生を養成して居たから、そこへ懸合つて稲垣銀治と云ふを雇つた。其後尚銀治氏の紹介す稲葉厚五郎、中村田吉両氏も雇つた。尤も稲垣氏でさへ慶応義塾でピネオの文典とか、カツケンボスの万国史とかミツチエルの地理書とか云ふ位のものを読んだくらゐのもので、発音は凡て所謂変則読みであつた。それから、普通科に於ても、経書や歴史は以前のものを用ゐたが、其の他西洋物では矢張り西洋事情を第一として、上海出版の博物新編、地球説略、などを用ゐた。こんなものが藩学校で教へられるので、旧来の先生連は一同擧聲して居たけれども、流石に何とも云はなかつた。」

草間時福 「愛媛県松山英学所 所長」 就任

草間時福は権令岩村高俊の要請で明治八（1875）年愛媛県立松山英学所所長着任。英学とあわせ慶応義塾の演説（スピーチ）討論（デイベイト）を採り入れた教育を進める。学制改革に伴い、松山変則中学校、北予中学校、松山中学校の校長を歴任、明治十二年帰京する。ジャーナリストを経て通信省に入省、のちに郵便電信学校長、航路標

識管理所長になる。俳号天葩。兄は子明、子息は時光（鎌倉市長）令孫は時彦（俳人協会会長）の俳人の系譜である。詳しくは永江為政編纂『四十年前之恩師草間先生』を参照されたい。

中学教育制度としては明治十二年の「教育令」以降国家統制が強化されていくが、小論のテーマと直接関係がないので割愛する。

三、松山中学校の外人英語教師

松山中学校の外人英語教師として、『松山中学校教職員名簿』や卒業生の回想記を集約すると六名が確認できた。列挙するとノイス（明治二二年～二三年）、ターナー（明治二四―二五年度）、ホーキンス（明治二六年度）、ジョンソン（明治二七年度）、ブランド（明治二九年度）、アレキサンダー（大正二二年度）がそれぞれ一年間契約で教鞭をとっている。

『毎日新聞社編 わが母校②』（昭和五一年刊）で、岡野久胤（明治二六年卒）の「回想記」が紹介されている。東京帝大で上田万年に学び、後年松山方言二五〇〇個収録した『伊予松山方言集』を発刊。松山中学では河東碧梧桐や竹村秋竹、山内正瞭（東京商大教授）、山内正雄（愛媛県医師会長）と同期である。翌二七年卒には佐伯矩（国立栄養

研究所初代所長）、菅菊太郎（松山農学校長、初代県立図書館長）、景浦直孝（号稚桃、松山市名誉市民）、安井雅一（松山市長）、井上久吉（松山市長）らが輩出している。この年次は中学時代に二、四名の外人教師から直接英語（アメリカ語）を耳にしており、松山中学・松山東高校百年の校史を通してもっともユニークな恵まれた英語教育の時代であったのではなからうか。

上記の外人英語教師についてはすべてカタカナ表記であり、英語のフルネームを推定するのは至難に近く、日本英文学史学会中国・四国支部事務局担当の県立広島大学馬本勉研究室に照会し、並行して同志社人文科学研究所を通じて同志社が保存している「同志社・アメリカンボード資料」で人名と在日期間の確認ができた。

本小論は、同志社が保存している「Papers of the American Board of Commissioners for Foreign Missions」と「Mission Register」記載の人名で特定している。このテキストは戦国時代から豊織時代にかけて日本にキリスト教を伝えたイエズス会宣教師らが日本から本国に送付した書翰と報告書と同類の、派遣宣教師がアメリカ本部宛に送付した文書であると理解してよい。

W・H・ノイス

フルネームはWilliam Horace Noyesである。岡野久胤の

「回想記」では「偉丈夫で、いつもハンチングをかぶって授業をしていた」と評している。アメリカンボード文書では「for life service: Japan: Maebashi. 1894 - 1897」と記載されている。松山中学校（伊予尋常中学校）の外国人英語教師として初めて名前が出てくる。国籍はアメリカまたはイギリス（『松山東雲学園百年史』）の両説があるが、通説はアメリカ籍である。

トルコのクルドで宣教師の子供として生まれた。アームスト大学・アンドヴァー神学校・ユニオン神学校で学び、明治二二（1889）年アメリカン・ボード宣教師として来日、松山に派遣された。

ノイスの伊予尋常中学校教師就任の経緯は、松山基督教教会『回顧四十年』（大正十四年刊）では次の通りである。

「明治廿二年以後アメリカン、ポールド宣教師ノイス氏、ウーマンス（ノイス氏夫人を指す）、ポールド宣教師ガニソン、ジャジソン、ハウードの諸嬢が來松して伊予中学校（愛媛県立松山中学校前身）の教師になったり、松山女学校（松山東雲高等女学校前身）の教師になったりして生徒教授の余暇大に地方の布教に声援を与へられた。（中略）明治二四年には女学校の教師ジャジソン氏が、二宮牧師の助けによって松山夜学校（松山城南中学校前身）を設立せられて、大いに労働者教育に力を尽くされるやうになった。爾来今日まで、松山女学校と松山夜学校は松山教会と提携し

て、地方に於ける基督教の一大勢力となつてゐる。」

また伊予尋常中学校でのノイスの授業ぶりについて教え子である高浜清（虚子）は『虚子自伝』の中で回顧している。

「その頃ノイスといふアメリカの教師が來まして、会話を教へました。ホワット・イズ・ジスと指を示す。ザット・イズ・エ・フィンガーと答へるやうなことから始めまして、会話を進めて行きました。そのノイスもマイ・ボーイ・カム・ヒヤと私を呼んで教壇に立たせまして、ノイスの代わりにホワット・イズ・ジスと指を示して、他の生徒にザット・イズ・エ・フィンガーと答へさせたりしました。」

（略）五年級になつた時分に私は、書肆の店頭によく立ちました。さうしてウエプスターの中辞典を手に入れたことに、無上の喜びを感じました。」

明治二四年前橋の共愛女学校に赴任、清心幼稚園の創設にも尽力した。昭和四年婦米し、社会的・教育的事業に従事し、ニューヨーク州教育局の重要な地位についた。昭和四（1928）年七月五日永眠した。

W・P・ターナー

ノイスの後任の外人教師ターナーは、岡野久胤の「回想記」では「長身で、絹のハンカチを胸からとり出すたびに、いいにおいが教室内に、ただよつた。あるとき、ターナーは、英語で「DOGは日本語で何と言いますか」と、質問

した。茶目つ気たつぶりの生徒たちだ。「けん(犬)」「く(狗)」といった答えが続出。ターナーは、目を白黒させるばかりだった。」と評している。

「アメリカンボード文書」に記載のあるターナー(Turner, Joyce S.)は来日が1954年であり非該当である。

一方、明治初期、来日した宣教師のうちターナー(Turner, William Patillo)なる人物が「資料御雇外国人」(ユネスコ東アジア文化研究所編)に下記の通り記載されている。

【ターナー Turner, William Patillo 1864-1912 アメリカ人キリスト教(アメリカ南部メソジスト監督教会宣教師)】
W・P・ターナーは文久二(1864)年アメリカ・ジョージア州に生まれ、同州アトランタのエモリー・カレッジを卒業し、明治二四年(一八九二) Y M C A 教師として来日、公立学校(松山中学校カ)、関西学院とパルモア学院で教える。明治四三年宇和島教会着任、四四年松山地区監督、四五年広島地区監督、広島女学校チャブレン就任。同年三月一〇日永眠。墓地は神戸市再度山修法ヶ原外人墓地にある。

ターナーの公立学校在勤を明治二四年〜二五年と想定すると、上述の公立学校が松山中学校(愛媛県尋常中学校)に該当する。残念ながら W・P・ターナーに関する愛媛県尋常中学校関係資料がないが、関西学院には勸学資料が残っている。『開校四十年記念 関西学院史』では明治二六年か

ら三〇年まで、『関西学院百年史 I』では明治二五年から二九年まで、関西学院とパルモア学院で教鞭をとった旨記載がある。『来日メソジスト宣教師事典』(教文館)にも同様の記載がある。

パルモア学院は明治一九年八月に来日した米国南メソジスト派宣教師 J・W・ランバス一家が神戸・元町の外国人居留地に創立した「読書館」から始まる。学校名「パルモア」は創立時に多額の資金援助と大量の書籍を提供した米国ミズーリ州の牧師 W・B・パルモア師にちなんで名付けられた。明治二二年には創立者の子息 W・R・ランバス博士がパルモア英学院男子部を母体に関西学院を創立し、大正二二年には女子パルモアが設立され、後の啓明女学院に発展した。現在もパルモア学院は存続している。

『日本基督教団宇和島中町教会・創立九〇年誌』並びに『鶴城幼稚園七〇年の歩み』に拠れば、明治三七年 W・P・ターナーにより「宇和島美以教会」内に保育所が開設されたのを記念して大正六(一九一七)年「ターナー記念鶴城保育園」として設立認可を受けている。第一回卒園児は四名で、第六回卒園児二〇名の一人として西山都留子(映画俳優 轟夕起子)が記されている。

(参考) Y M C A (キリスト教青年会) は日本人にとって馴染みのある組織であるが、1844年にロンドンで G・ウイリアムと一一名の友人によって創設された。当初から

超党派的な構成でヨーロッパ、アメリカにと驚異的に広がり1855年にはパリで最初の世界大会が開催された。日本の諸学校へは、米国改革・組合・バプテスト・長老4派のミッショナリーボードと北米YMCA同盟との合同委員会によって派遣された。第一期(1890～1893)が二名、第二期(1900～1912)が日本キリスト教青年会が斡旋し九九名が来日し、三九都市の(旧制)中学・高校に派遣された。W・P・ターナーは第一期の派遣教師の一員で明治三四(1901)年に来日している。

ホーキンス

W・P・ターナーの後任の外人教師ホーキンスは、岡野久胤の「回想記」では「謹厳寡黙の紳士で、最初から仕舞いまで、流暢な英語でペラペラペラ。お陰で、いつも煙にまかれて五里霧中だった」と評している。

ホーキンス宣教師は「アメリカンボード記録」にも「資料御雇外国人」に見当たらないが、W・P・ターナーと同じく、明治二四年(1891)頃YMCA教師としての来日ではあるまいか。目下調査中である。

C・ジョンソン

フルネームは Johnson, Cameron である。クリスチャンネームは不明である。「アメリカンボード記録」にはC・

ジョンソンの記載はないが同志社が所蔵する「Mission Register, vol.1」によればC・ジョンソンはユニオン神学校出身の同志社系(アメリカン・ボード)宣教師であり、同志社普通高校(中学校)の教員期間は明治二六年(一八九三年)九月から明治二七年六月までである。

一方、C・ジョンソンに関する「松山東高等学校百年史」の「歴任教職員」では「Johnson 明二七 英語 イギリス」とあり、勤務期間は明示されていない。国籍はイギリスとしているが、下記の資料から判断してアメリカ人と推察される。

①漱石研究資料では第一級の荒正人「漱石研究年表」(集英社、昭和五九年)では、「アメリカのミシシッピ州の人。同志社大学教師を経て愛媛県尋常中学校に転任し、1年間就職している。カメロン・ジョンソンは、退職した後、アフリカを訪遊し、アメリカに帰ったという。愛媛県尋常中学校では、以後外人教師を雇っていない。」とするが、この記述は誤りで、明治三九一四〇(1906～1907)年にはブランドが、大正二一一三(1923～1924)年にはアレキサンダーがそれぞれ一年間契約で教鞭をとっている。

②尚、江藤淳「漱石とその時代(第一部)」新潮社(1970)は漱石と米人教師カメロン・ジョンソンの給与を同額としている。「前任者の米人教師カメロン・ジョンソン

ンの給与の枠をそのままひきついでいた」

郷土史家や漱石研究者の多くが「漱石と外人教師の給料は同額」と記述しているが、C・ジョンソンの給与は一五〇円（二説では二二〇円）で漱石は半額強の八〇円である。

（注）才神時雄『漱石の月報八十円の背景』では一五〇円、秦郁彦『漱石文学のモデルたち』は月報一二〇円である。両書ともに出典（資料）を明示していない。

C・ジョンソンの松山での住所（寄宿先）は、後任の漱石も下宿した小料理屋「愛松亭」の二階である。建物は松山藩の家老であった菅家の中間部屋を増改築したもので、独身か妻帯か不明であるが食事は小料理屋で手配したのであろう。所有者は津田安五郎（津田安）という骨董屋である。愛松亭は現在愛媛県美術館別館「万翠館」（元松山藩主久松家別邸）建設時に取り壊された。明治二八（一八九五）年五月二八日付正岡子規宛書簡に「小生宿所は裁判所の裏の山の半腹にて眺望絶佳の別天地」としている。昭和五六年（一九八一）愛松亭跡に「漱石旧居記念碑」が立てられた。（『愛媛県百科大事典』ほか）

外人英語教師の勤続年

夏目金之助（漱石）の愛媛県尋常中学校の在勤は明治二八年四月から明治二九年四月までである。才神時雄は『漱石の月俸八十円の背景』でノイスが私立伊予尋常中学校に招

聘されたのを明治二四年とし、ターナーを翌二五年、ホーキンスを二六年、ジョンソンを二七年として漱石の二八年との整合性をもたせている。

虚子は明治一八（一八八五）年県立松山第一中学校に入学するも半年後に廃校となり翌明治一九年に新設の松山高等学校に入学。明治二〇（一八八七）年、この年に創設された私立伊予尋常中学校に入学し、明治二五年（一八九二）四月に卒業している。『虚子自伝』で描いた英会話の授業風景を四年次とすると明治二三年、三年次とすると明治二二年となる。

明治二四年にノイス夫妻は前橋・共愛女学校に赴任しているので、才神時雄がノイスの招聘を明治二四年としたのは間違いである。明治二二年（または二三年）であろう。

ノイスの後任であるW・P・ターナーは明治二四（一八九四）年YMCA教師として来日は明確であり、明治二五年から教鞭をとったとすると、虚子にとつての英語教師はノイスのみであり『虚子自伝』でノイスのみを英語教師として採り上げたことには整合性がある。

論者は、同志社アメリカン・ボード派遣の外人教師の在勤期間は、ノイス（明治二二～二三年度）、ターナー（明治二四～二五年度）、ホーキンス（明治二六年度）、ジョンソン（明治二七年度）と考える。県資料（公文書）や教会資料には赴任・離任年月日は記載されていない。

四、同志社とアメリカンボード

来日した外人英語教師の多くはプロテスタントの宣師であつた。この教師たちに先導されて優れたキリスト者が全国各地で輩出した。代表的な集団として三つのバンドをあげておきたい。①ブラウン、バラに学んだ青年、植村正久・押川方義らの「横浜バンド」②クラーク博士の札幌学校に学んだ青年、内村鑑三・新渡戸稻造らの「札幌バンド」③ジェーンズの熊本洋学校に学んだ青年、海老名弾正・横井時雄・金森通倫らの「熊本バンド」である。

松山におけるプロテスタント布教や中学校、女学校の外人教師の多くは「アメリカンボード」からの派遣であり、新島襄が創設して同志社と直接、間接に結びついている。ここでは「同志社・アメリカンボード」として、簡潔に記述しておきたい。

アメリカン・ボード（英語：American Board of Commissioners for Foreign Missions）は1606年アンダーバー神学校で学んだ学生を支援する組織として生まれた団体で1810年ニューイングランドで正式に発足した。最初インドに派遣されたが、東南アジア、中近東、アフリカと拡大し、日本には1869年のピッツバーグで開催された第六〇回年会で派遣が決定した。D・C・グリーン夫妻が明治二（1869）年一〇月に横浜に到着、神戸で伝

道を開始する。会衆派を軸としたが、長老派、オランダ改革派などが加わった、無教派的な組織である。会衆派はイギリスから新天地を目指した清教徒が中核で、宗教改革の流れに属するものの、いかなる教會的・教理的信条にも拘束されない自由を尊重する立場を固守している。長老派、オランダ改革派はプロテスタントのカルヴァン派である。

アメリカンボードの日本派遣

アメリカンボードの日本派遣は他の教団より遅れて、明治二年にダニエル・クロスビー・グリーン宣教師、明治四年デイヴィス宣教師の派遣からであるが、本格化するのは明治七年（1974）新島襄がアメリカから帰国して以降であり、グリーンやデイヴィスらと共に翌八年に同志社を開校する。その設立の際にはアメリカン・ボードが援助をした。やがて、アメリカン・ボードの教会に同志社を卒業した伝道者が加わった。同志社並びに同志社アメリカンボードは新島襄を抜きにしては語れない。

アメリカンボードの学校教育は、同志社のほかに、神戸女学院、梅花学園、頌栄保育学園、松山東雲学園に当初から宣教師を送っていた。昭和三六年に米国合同教会世界宣教委員会と改称するが、それまでの日本へ派遣した宣教師数は三七四名と記録されている。そのほかに社会事業として岡山博愛会、淀川善隣館の支援など数多い。

松山東雲学園略史

松山東雲学園明治一九(1886)年九月一六日「私立松山女学校」として誕生する。四国最初の女学校(生徒数二名)であった。翌二〇年の創立一周年の開校式(生徒数約四〇名)には県知事も出席し、旧藩校の明教館で盛大に開催された。女学校(初代校長二宮邦次郎)は市内二番町に移転するが、学校経営はきわめて多難な時期を迎える。学園の存続の危機を乗り切る為、運営はアメリカンボードへ移管され、ボードの支援を受けて第二代コーネリア・ジャジソン、第三代オリーブ・S・ホイテ二代続いてのボード派遣の校長により教育のレベルアップが図られた。

昭和の戦時体制下は第四代西村郁夫、第五代西村清雄が支え、戦後の学園はアメリカンボードから新たに派遣された第六代C・S・ジレット夫妻により拡充強化されていく。詳述は避けるが、松山東雲学院は創設期から同志社・アメリカンボードと切り離しては語りえない。

同志社初期の愛媛県出身学生

愛媛県、特に松山から同志社に進学する者が多く、明治一七年四月在籍で一〇名、明治一五年九月在籍で一五名である。卒業生は各分野で多大の貢献をしている。

五年次(2名)

村井知至(社会主義キリスト者。明治三九年高野房太郎、片山潜らと労働組合期成会を結成。東京外国語大学教授) 重見周吉(医者。東京慈恵医科大学、学習院大学教授。後年は医院経営。著書『A Japanese Boy』)

三年次(2名)

池田徳孝(不詳)。

中川虎一郎(牧師。しか夫人は夫没後同志社病院看護婦長を務め、「ホノム聖人曾我部四郎」と再婚)

二年次(2名)

松浦政泰(女子教育者。同志社女学校教頭、日本女子大教授。著書『世界遊戯法大全』『同志社ローマンス』など)

武市庫太(政治家。愛媛県会議員、県農会初代所長、衆議院議員。子規と交友あり。号は蟠松、雪燈)

一年次(2名)

矢野広太郎(不詳)

吉田清太郎(牧師。松山女学校(松山東雲学園)支援。廃娼運動、監獄伝道、一九〇二年以降伝道生活に入る。)

神学(2名)

宮川富次郎(不詳)

小野忍(不詳)

五、おわりに

小論は平成二二年七月度例会で発表した内容を取り纏めたものであるが、不十分であることを先ずお断りしておきたい。テーマである「松山中学校の外人英語教師の来歴」についての先行論文は管見では見当たらず、わずかに才神時雄氏が触れているが正確とは云い難い。情報提供を頂いた同志社・社会科学研究所、関西学院・学院史編纂室、日本YMCA史料室スタッフに感謝申し上げたい。

今回は「テキスト」のみであり「コンテキスト」たる旧制中学校における英語教育史、外人英語教師が移入した地域英語文化について研究は、地元資料が少なく暗礁に乗り上げている。引き続き、教会や研究者からの情報の収集に つとめ、宗教的信念を持つてはる松山中学校で「現代英語」を語った明治三〇年当時の青い目の「坊っちゃん」英語教師の実像に迫りたい。

参考文献

一、基本図書

- 『Papers of the American Board of Commissioners for Foreign Missions』(同志社大学蔵)
『Mission Register』(同志社大学蔵)

二、参考図書

- 『アメリカンボードと同志社』P.F.ボラー(1947)
『同志社百年史』(同志社・1979)
『関西学院百年史』(関西学院・1997)
『松山東雲学園百年史』(松山東雲学園・1994)
『愛媛県立松山東高校百年史』(県立松山東高校・1978)
『慶応義塾史事典』(慶応義塾・2008)
『四十年前の恩師草間先生』(永江為政編纂・1922)
『押川方義』(藤一也・星雲社・1991)
『鳴雪自叙伝』(内藤鳴雪著・青葉図書・1976)
『回顧四十年』(日本基督教会松山教会・1986)
『虚子自伝』(高浜虚子著・青葉書房・1948)
『日本キリスト教歴史大事典』(教文館・1988)
『愛媛県百科大辞典』『愛媛県史』『松山市史』ほか

明治時代松山の子規関係史料断片

柚山 俊夫

一 はじめに

平成二二年二月の松山子規会例会において、「少年時代の子規宅一帯の住宅地図について」と題して、卓話をする機会をいただいた。話題のほとんどは、筆者が「伊予史談」三五六号（平成二二年一月）に投稿した「松山市街第三組の住民」のことであった。「松山市街第三組の住民」は、明治一五年一月に作成された「流慶橋寄附人名簿」から、子規宅一帯の住民の氏名を地図上に図示した報告で、今後、少年時代の子規研究に役立つのではないかと考えている^①。

少年時代の子規宅一帯の住宅地図については、すでに本会で活躍された和田茂樹先生^②が、明治一四年作成の「地価帳^③」に記載された土地所有者氏名から「松山市街全図^④」によって、住宅地図の一部を復元されていた^⑤。新史料には居住者名が掲載されているので、和田先生の地図になかった子規宅東側・南側についても図示することができた。

なお、子規会例会では、子規宅一帯の住宅地図以外にも子規関係史料を紹介したので、本稿ではそれら例会で報告した史料の紹介とその他の史料を紹介し、私見を述べてみたい。

二 明治一六年の松山中学校校舍配置図

下村為山が松山中学校の前身である北予変則中学校の校舍配置図を描いた絵は、これまでも各種の展示図録や教育文献等に掲載されている。北予変則中学校は明治九年九月から一一年六月までの名称で、絵にある旗に「変則中学」の文字があること、左上に「明治十年」と記されているから、この絵は明治一〇年ごろの様子を描いている。

一方、愛媛県行政資料「中学校」のなかに、明治一六年の校舍配置図がある。この配置図をトレースして文字を活字化してみた。

下村為山の絵にある校舎・建物の説明の文字も活字化^⑥。

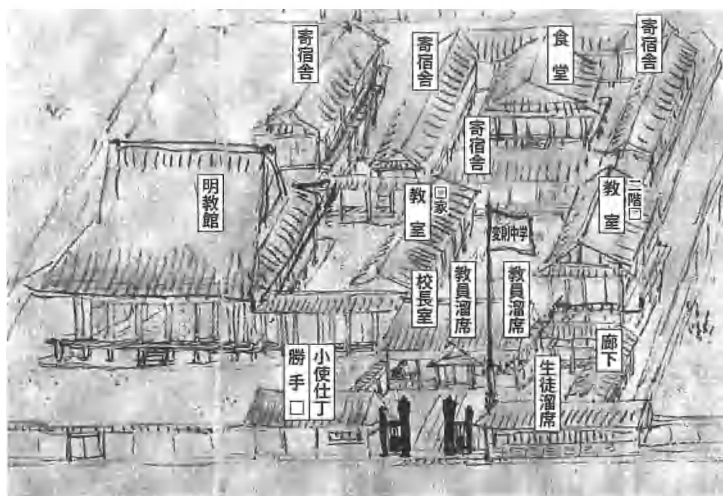


図1 明治10年の北予変則中学校(下村為山画)
注) 坂の上の藝ミュージアム「子規と真之」2007年から転載の上加筆した。

した(図1)ので、明治一六年の校舎配置図(図2)と比較してみよう。配置はほぼ同じである。明教館の建物は、明治一六年の校舎配置図には「試験場」とあって、「教場」とは區別されている。

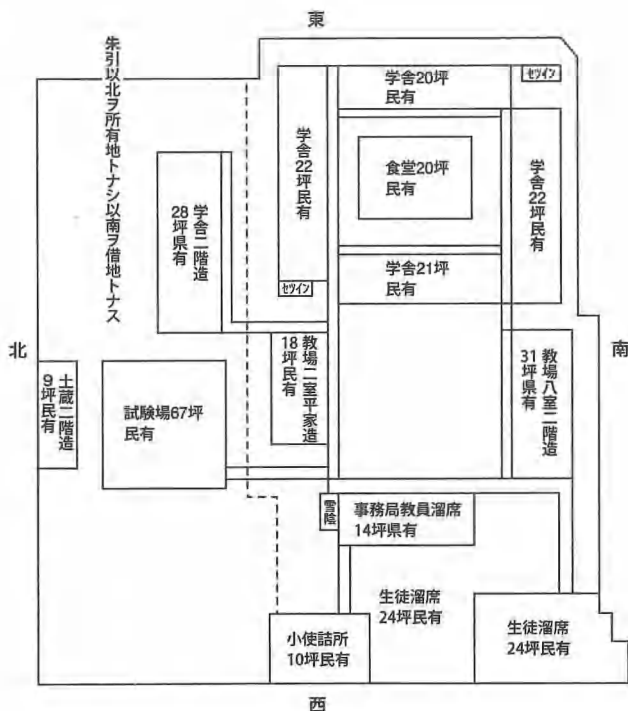


図2 明治16年の松山中学校校舎配置図

なお、永江為政編『四十年前の恩師草間先生』(大正一一年発行)に「松山中学校(愛媛県北予中学校時代)の旧校舎全景」の写真がある。写真下には「前面の長屋は旧藩立学校養成舎の建物、最左端の建物は明教館の講堂、其背後の二階建の一棟は当時の中学校寄宿舎」とあり、図1・2と一致する。

三 履歷書

子規の後見人大原恒徳の履歷書

大原恒徳は子規博図録『子規の系族』(一九九〇年) 30・

31ページに紹介されている。年譜^⑦によれば、明治一二年に大原が正岡子規宅へ移転し、明治一五年に子規の後見人を解囑されている。大原は二代藩主松平定頼の眞筆を所持していた^⑧。なお、左に「恒恵」とあるが、恵は徳の異体字(本字)である。

(愛媛県行政資料「官吏履歷」)

履歷書

愛媛県士族 元松山県

大原 恒恵

俗称 大次郎

嘉永四亥年二月廿八日生

廿八年五ヶ月

明治九年四月廿四日

一、小学三等授業生被申付候事

全年六月十六日

一、愛媛県裁判所雇雑務掛被申付候事

全年十一月卅日

一、雇被免候事

同年十二月十八日

一、高松支庁へ御用金を為護衛被差遣候事

明治十年四月十三日

一、第一課雇浄書科専務被申付候事

明治十一年二月

一、往復科専務被申付候事

明治十二年四月一日

一、庶務課雇被申付候事

同年六月十八日

一、等外三等出仕被申付、学務課専務被申付候事

右之通ニ御座候也

明治十二年九月廿九日

大原 恒徳^⑨

県令岩村高俊殿

服部嘉陳の履歷書

服部嘉陳は子規博図録『子規の系族』(一九九〇年) 41、45ページに紹介されている。また本誌八号に服部嘉修「服部嘉陳あれこれ」がある。「伊予史談」三三三号(大正一二年)9ページに、服部嘉陳が幕末の京都で活動したことに触れている。

(愛媛県行政資料「官員履歷」)

石鐵県貫屬士族 元松山県

服部 丹治嘉陳

通称 嘉門

庚午十一月東京詰権大属申付候事

松山藩

東京詰権大属申付候事

辛未六月

松山藩

東京詰権大属差免候事

壬申正月

石鐵県十一等出仕申付候事(別履歴書に書記掛とあり)

同六月八日

任石鐵県権大属

庚午閏十月十七日

松山藩権大属申付候事

辛未三月十五日

松山藩大属申付候事

同八月廿五日

依願免職申付候事

壬申三月二日

石鐵県十一等出仕申付候事

同六月八日

任石鐵県権大属

藤野漸の履歴書(二通)

藤野漸は子規博図録『子規の系族』(一九九〇年)46、47

ページに紹介されている。「伊予史談」八五号(昭和一一

年)3ページに、「明治九年「讃岐国ニ愛媛県支庁ヲ置キ属

官藤野漸ヲ以テ支庁長トス」とあり、同八八号(昭和一一

年)52ページに、「久万租税課出張所大属藤野漸氏」とあ

る。さらに同八九号(昭和一一)57ページに「名士藤野

漸」の紹介記事がある。

(愛媛県行政資料「官員履歴」)

石鐵県貫属士族 元松山県

藤野和氣真人漸

通称 友之進

(愛媛県行政資料「官吏履歴」)

愛媛県士族 元松山県

藤野 漸

通称 友之進

明治五年壬申三月

一、石鐵県十一等出仕庶務掛申付候事

同年五月

一、任石鐵県権大属

租税掛申付候事

明治六年癸酉二月

一、免本官

同七年甲戌十月

一、補地理寮十二等出仕庶務課

同八年七月廿日

一、任愛媛県権中属

租税課専務改正掛申付候事

同年八月十五日

一、地理掛兼務申付候事

同年十一月七日

一、租税課専務地理掛兼地租改正御用掛申付候事

明治九年一月八日

一、任権中属

明治十年一月廿五日

一、任同県三等属

明治十二年一月四日

村上格致の履歴書

子規宅の西隣が村上格致宅である。本誌二八号に森岡正雄「子規と村上家の人々」があり、村上格致にも触れる。

「伊予史談」八九号（昭和十一年）18・19ページに村上格致の名があり、「奥平家臣也」とある。

（愛媛県行政資料「官吏履歴」）

石鐵県貫属士族 元松山県

村上源格致

通称 助八

庚午六月廿八日

一、松山藩史生申付候事

同十二月廿日

一、松山藩少属試補申付候事

（朱）「辛未七月十四日

一、松山藩被廢

同年同月同日

（朱）「同十一月二日

一、松山県被廢

同年同月同日

一、追テ御沙汰候迄是迄ノ通事務取扱可致事

壬申三月廿七日

一、旧県引渡濟二付、事務取扱差免候事

同六月八日

一、任石鐵県十四等出仕申付候事

四 松山市街全図にみる松山中学校と城戸屋旅館

松山中学校は二番町にあつた

一番町四丁目のNTT愛媛支店西側に、「漱石ゆかりの松山中学校跡」の碑がある。一方、学校設置書類②の学校位



図4-2 明治中期の城戸屋旅館

注) 道路に面した出入口に「御宿 城戸屋」の看板がある。戸嶋健二氏提供「商工技芸愛媛魁」(明治19年)の複写より。

置は「温泉郡二番町」と記されている。「石碑は一番町にあるのに、なぜ二番町にあつたとされるのだろうか。」と疑問に思っていた。

松山市街全図で、松山中学校のあつた一番町の西部分をみて、この疑問が氷解した。図3のように「中学校」と記してあるあたりに、52番地と11番地がある。周辺の地

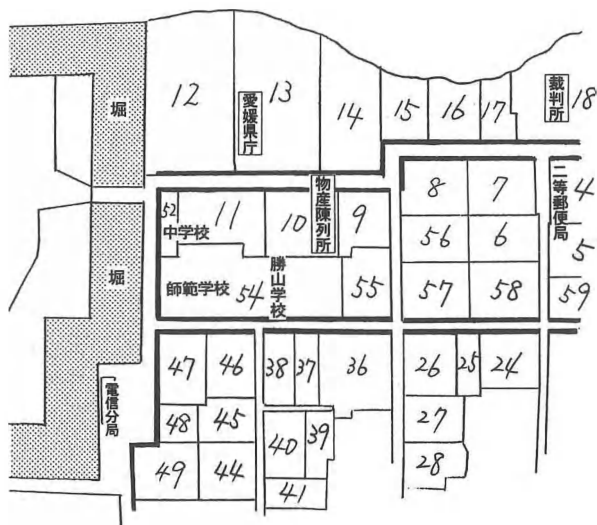


図3 松山中学校一帯の地番図

注)「松山市街全図」により作成。

一番の状況から、52番地は二番町、11番地は一番町である。現在はどちらも一番町だが、当時は中学校敷地西部分は一、二番町だったのである。二章でみたように、松山中学校の職員室・校長室・明教館は学校敷地の西部分にあつた。そこで敷地西部分の52番地、つまり二番町を松山中学校の所在地としたのだろう。

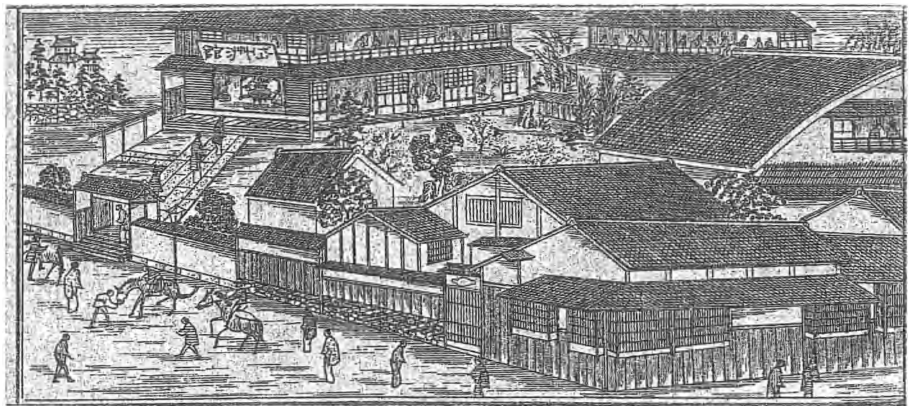


図4-1 明治中期の岱洲館

注) 左上上の家屋に「岱洲館」という看板がある。戸嶋健二氏提供「商工技芸愛媛魁」(明治19年)の複写より。

城戸屋旅館は三番町八番地にあった
愛媛県立図書館のホームページに「レファレンス協同データベース」があり、館外から寄せられた質問と回答を掲載している。それに次のような質問があった。
松山市三番町にあった城戸屋旅館について、①現在の番地、②建物現存の有無、③旅館の営業時期、④城戸

幡太郎の実家らしいがこの人物の名前の読みと略歴、
⑤別名の「岱州館」の意味、以上5点が知りたい。
これに対して愛媛県立図書館は、次のとおり回答している。

- ① 松山市三番町4丁目「城戸屋旅館跡碑」がある。
- ② 建物は現存していない。
- ③ 正確な営業期間は不明。
- ④ (略)

⑤ 城戸幡太郎の祖父(元・大洲藩士)が維新後に始め、屋号を「大州館」とした。宿泊客に「大」よりも「岱」の方が雅趣があると勧められ、岱州館とした。その後は祖父も「岱州」を雅号とした。

さて、戸嶋健二氏から、明治一九(一八八六)年に刊行された『商工技芸愛媛魁』に「各府県御定宿 温泉郡松山三番町八番地 岱洲館 城戸シゲヤ」とあって、その景観図が掲載されているとご教示いただいた。戸嶋氏が古書店から入手した景観図(複写)によれば、街区の角にあって広大な敷地に多くの建物が並び立つ旅館である。図4のとおり、城戸屋の出入り口は右手、道路に面した門に「御宿城戸屋」と記され、「岱洲館」の文字は左上上、さらに左にお城を描くので、左方に城がある景観である。

さて、冒頭に述べた明治一四年作成の「地価帳」で「三番町八番地」を調べると、土地面積は四九二坪余と広大で、土地所有者は竹村貞壽である。なお九番地の土地所有者は

なたかが指摘していたり紹介していたりすることかもしれない。先学の方々よりご批評をいただき、より正確な史実に迫っていきたいと考えている。

注

- (1) 和田克司氏からは、明治一五年当時、大原恒徳が子規宅敷地内に同居していたことが確実になったこと、歌原誠と増田正春が同一敷地内に住んでいたこと、子規宅東南の中の川に架けられた橋の名が流慶橋であることなどが、新知見であるとのこと指摘をいただいた。
- (2) 和田茂樹先生は、講談社版『子規全集』の編さんを中心になって進められるなど、子規研究と顕彰をリードされた。先生を抜きにして「子規顕彰活動のあゆみ」を語ることはできない。
- (3) 「市街地地価一筆限り帳」などと呼称することもある。
- (4) 愛媛県立図書館所蔵。この図の南部は子規博だより2巻3号別刷付録として複製されている。
- (5) 講談社版『子規全集第二十二巻 年譜 資料』(一九七八年)一五ページ掲載の地図、同書七二四ページ掲載の地図(地名の誤表記については、和田先生自身が「子規少年時代の『松山市街全図』」(子規会誌四号)ですでに訂正済み)、和田茂樹先生「子規少年時代の『松山市街全図』」(子規会誌四号、一九八〇年)掲載の

地図、和田茂樹先生「子規周辺の人々と『松山市街全図』」(子規博だより2巻3号、一九八三年)。

(6) 平成二二年二月の子規会例会において、和田克司氏から絵図にある文字の読み方の一部をご教示いただいた。

(7) 講談社『子規全集第二二巻 年譜 資料』一九七八年。

(8) 「伊予史談」第二一号(大正六年)の「伊予古文書」所収。

(9) 愛媛県行政資料 明治一六年「中学校」所収。

愚陀佛庵の時期における子規、漱石の転機（上）

和田克司

はじめに

従来、自筆草稿が断片的になってしまつたために、着目されることの少ない「承露盤」明治二十八年秋の部の一葉が持つ書写過程を通じて、子規が「承露盤」を書き継いだ具體的な内容を見る。さらに、大島梅屋の資料の中に、子規の自筆稿本があった。その稿本は、子規が、松風会の人々、とりわけ熱心に耳をかたむけた梅屋に、懇切丁寧に、自著『瀬祭書屋俳話』増補改訂版の新刊書を傍らに置きながら、まるで黒板を使って説明するがごとくに、一葉の紙面の端から端へと、話の内容の要点を記しながら、さらに裏面に至り、長時間かけて、説明を果した子規の自筆原本であることが判明した。また、紹介はされていたものの、解明に至っていないかった、子規、漱石、霽月、極堂の俳句会の俳句を明確にすることができたことを記す。

本稿は、子規が、人々に取り囲まれながら、健康を回復し雄飛せんとする契機を、資料から汲み取り、子規の文

学への、並々ならぬ取り組みを見ようとするものである。ここに、松山市立子規記念博物館には、「承露盤」、ならびに、大島梅屋資料所収「子規口述筆記稿本」の影印、版行を許可された。館蔵資料提供に深謝する次第である。

一、「承露盤」明治二十八年秋

今日、「承露盤」を自筆で全丁辿ることはできない。すべて分割され、頒布されたためである、その中の、重要な一葉が、松山市立子規博物館に蔵されている。第五十二回特別企画展「坊っちゃん百年」図録などに、収録されているものである。本一葉は、整った清書であるために、書き継ぎなど見えぬほどであるが、子規の筆跡を追うことで、明治二十八年九月上旬の松風会の動きがわかるほどに、鮮明に時間経過を解析することができる。また、写真版にて明確な如く、各句には、頭注で記号が記され、◎、ホ、世、太、早とあるが、詳述しない。それぞれ、子規が発表を続

けた手控えの記号である。

- 1 鐘つけば銀香散る也建長寺 漱石1海南9・6
- 2 白露や芙蓉したたる音すなり 同 海南9・6
- 3 試みん風の芒に一刀 碌堂1海南9・7
- 4 精進に菊の香寒し僧並ぶ 同 海南9・7
- 5 試みに灯置かばや萩の奥 同 海南9・7
- 6 長き夜を只蠟燭の流れけり 漱石2海南9・7句会工
- 7 露深き野菊の中の地藏哉 梅屋1海南9・8句会オ
- 8 乗りながら馬の糞する野菊哉 漱石3海南9・8句会オ
- 9 名月や犬あらはるる茶木原 叟柳1海南9・12
- 10 秋風や竹四五本の梢より 同
- 11 大寺の扉あくれば初嵐 碌堂2海南9・10句会カ
- 12 名月や山僧ひとり石に坐す 三鼠 海南9・10
- 13 石うてば稲妻はしるあら野哉 碌堂3海南9・11
- 14 寺町や芭蕉破るる堀の内 愛松1海南9・10句会カ
- 15 名月や向ふより来る馬の鈴 狸伴 海南9・10
- 16 馬に二人霧を出でたり鈴の音 漱石4海南9・10
- 17 長き夜や燈下に吾黙然たり 愛松2海南9・18
- 18 暁や稲妻消ゆる海の上 同 海南9・18
- 19 粟稗や案山子に残る夕日影 同 海南9・11
- 20 月高し一里を行けば與謝の海 叟柳2

便宜上、句頭に通し番号を付し、作者名の下に本葉での作者の順序を記入した。末尾の数字は、海南新聞に発表された月日である。すべて、二十八年九月の記録である。



承露盤

「承露盤」の筆跡と内容より見て、一葉の書写時期の区分を考察する。漱石1、漱石2は、「石」に「」あり、漱石3、漱石4には「石」に「」なし。もつとも、後半12と、13との間に「石」があり、点の有無が見られる、叟柳1は、柳の正字であるに対し、叟柳2は柳の異体字。碌堂1の「堂」の第一画と、碌堂2の「堂」の第一画の長短と、筆の慣れ。愛松1の「松」の楷書と、愛松2の「松」のくずし。以上にて、前半と後半とを通じて、書体と筆勢の差があることを概観できる。

全体的な、主観的印象では、前半十句では、前半六行が、やや横広の、ゆつたりとした配置の書きぶりである。漱石2より、縦長の書体に移り、叟柳1にてわずかながら、行間に間隙が出てきている。後半十句では、前半六句の漱石4までと、次の愛松との間には、微妙ながら、時間差がある。愛松2の二句、ないし三句の、冒頭より流れる方向が、それ以前の句の流れに比べると、右傾しているからである。叟柳2にも、その傾向がみられる。末尾の叟柳2の作者名が、やや左に見えるのはそのためである。20叟柳2と、愛松2と書写時期が、同時期かどうかは微妙で、明確な区分は難しい。

「承露盤」と同様に、松風会の動きが読み取れるのは、「病余漫吟」と海南新聞の俳句掲載状況である（註1）。右の「承露盤」と、ほぼ同一時期の子規の句は「病余漫吟」にて

明示できる。

秋時候

長き夜を何に更かずぞ岡の家

夜長 海南28.9.6
飄亭宛書簡28.9.8

蠟燭の燃えきれんとして夜ぞ長き

夜長 句会エ
ひややか

冷かに螢の背中の入日かな

夜寒 句会カ9.6以前

朝寒や蘇鐵見に行く妙國寺

朝寒 句会オ9.6以前

賣れ残る木魚一つに秋の行く

暮秋 句会カ9.6以前

猿蓑の秋の季あけて讀む夜哉

秋時候雜「燈火漸可親」

秋天文

精進のこよひに落ちて月の客

名月 句会アか

蓬生や我類はしる露の玉

露

釣鐘のそばに寄られぬ野分哉

野分 句会ウか

兎角して九年の月見友もなし

「達磨賛」

豆腐買ふて裏道戻る野分哉

野分 句会ウか

晝の灯や本堂暗く秋の風

秋風 句会アか

藍色の海の上なり須磨の月

月「須磨にて二句」

馬下りて川の名問へば秋の風

海南28.9.7

秋風松風会9.6追吟

飄亭宛書簡28.9.8

棧や下をのぞけば秋の風

海南28.9.10

秋風 句会アか

秋風 句会アか

待の朱鞘に出たつ月見哉

名月

淺草や猿飼ふ店の秋の風

秋風 句会オカ

絶頂や銀河ささへる劍巖

天の川 句会イカ

初嵐櫓の足場崩れけり

初嵐 句会カ

秋植物

鷄遊ぶ銀杏の下の落葉かな

銀杏落葉

駄菓子賣る村の小店の木槿かな

木槿

露に伏す薄の原の朝日哉

薄

かせを干す紺屋の柳散りにけり

柳散 句会エ

風をいたみ萩の上枝の花もなし

萩 句会カ 9.6以前

飄亭宛書簡 28. 9. 8

草の中に野菊咲くなり一里塚

野菊 句会オ 9.6以前

爪紅の手をのべて芙蓉折らんとす

芙蓉 9.6以前

破れ盡す貧乏寺の芭蕉哉

芭蕉 句会カ 9.6以前

右の「病余漫吟」一覽を通じて、「承露盤」と共通する句題が存在することが分かる。たとえば、「承露盤」6の漱石2の句と、「病余漫吟」秋時候の「夜長」「句会エ」(註1)の句である。当日の句題は「蠟燭」、大島梅屋句題控えの順序で言えば、五番目に該当する「句会エ」、開催時期は、海南新聞の発表時期より見て、九月六日以前といった状況が判明するのである。

したがって、右の「病余漫吟」に注記した、句会、句題

の状況から見ると、掲出の「承露盤」については、8漱石3で注記したように、「病余漫吟」と同一の句会記号を付加できる。もつとも、句会オと句会カとの句題は、近接して記されているために、あるいは、同日の句会のものかもしれない。「句会エ、句会オ」も同様である。

かくて本「承露盤」は、内容的には、9と10の叟柳1を境として、7梅屋までの前半部分と、それ以降の後半に区分できる。さらにまた、殆どの句が、海南新聞への発表時期が明確であるために、叟柳1を境とする、前半の九月上旬と後半の九月十日前頃と画然としており、句の制作月日が、互いに近接していることも、明確なのである。一葉の「承露盤」が示す、時間経過の具体的な例である。

二、増補再版「瀨祭書屋俳話」の刊行と

子規の自筆「子規口述筆記稿本」

大島梅屋の記録した資料が松山市立子規記念博物館に所蔵されている。その中に、子規の自筆稿本があった。「大島梅屋資料三の二の7」「子規口述筆記稿本」一葉である(註2)。27.0×40.3前後の大判の野紙で、中央部に「伊豫教育義會事務所」とある。明治二十年春、伊予教育義会によって、伊予尋常中学校が創設された。虚子が入学し、碧梧桐と並ぶことになる契機となった団体である。

本「子規口述筆記稿本」が、子規の口述筆記であることは、判明していたが、その内容については、未解明であった。しかし、閲読し、解明して行く過程で、子規の注記の数字が、「増補再版 獺祭書屋俳話」のページ数と合致することから、一挙に、その性格が明確になり、子規が、松風会の人々に、説明した肝要なことも、記録されていたことが分かったのである。数字には、二種ある。通例の数字と括弧を括った数字である。() 括弧で括った数字が増補部分の「芭蕉雑談」のページ数で、「増補再版 獺祭書屋俳話」では、初版のページ数に続いて、増補された「芭蕉雑談」を通しページ数にしないで、新たに1ページから数字を入れたために、同一ページ数が残ったのである。第三版では、改良された点である。

「子規口述筆記稿本」に記入された数字が、すべて「増補再版 獺祭書屋俳話」のページ数と完全に合致することは、子規が、梅屋らのために、後で参照できるように、ページ数を記入したのであった。書名の説明より始めて、同書の冒頭より説明したことは、本「子規口述筆記稿本」の注記で明白であり、並々ならぬ意気込みで、説明を続けた跡をたどることができる。

本稿での翻字の組版は難しいが、ほぼ記述した順序で、写真版の内容を翻刻した。なお、□記号で難読の箇所を示した。子規の記した数字は「増補再版 獺祭書屋俳話」の

ページ数を示す。同注記の、私に記した該当箇所のページ数は「」で括り、閲読の便をはかり、内容把握のために、随所に註を入れた。註番号は、ページ数を意味し、数字のない註は、至近の部分の註である。

「子規口述筆記稿本」表

明 洪氏 其著 菜根譚 二行程 対句 獺祭 礼記

上 俗 本ヲ散乱セル状

下 山林ノ樂

足利時代 連歌 著者 藤原良基

「6」筑波 尊氏 道誉

新つくば 時代 心敬 宗祇 宗長 肖柏 実隆

一條冬良著 宗祇補助 「2」宗因 江戸ニ 来リ

さればこゝに檀林の木あり梅の花

5毛吹艸 檀林軒

貝おほひ 松意ナル友モアリ 松意ノ軒ヲ見テ競ヒシカ

ミナシ グリ 「5」 松意後二名ケルカハ分ラズ

虚 (栗) 檀林トハ皇后ノ名ニモ言出ツ

「5」ツツキ 徳川時代の建部綾足 涼岱 涼岱

都筑ハ続くトモ 向フカ岡続篇也

註5…「足利時代より元禄に至る発句」に調柳の句の出典「都

「筑の原」の説明。同集は、「俳諧江戸広小路」「俳諧向之岡」の続編となる。貞享五年序。

「6」三百

サルトリモチ

宮筒

猿 (繻)

カタウタ

7片歌 五七七 萬葉ノ下ノ句ト等シ

註7:「字余りの俳句」に「時として二十五音に至るものありて却つて片哥よりも猶長し」

9 47 17

註9:「俳句の前途」に「錯列法パーミューテーション」

註47:「女郎花」に「秋の七草」

17 さよふけて千鳥なく也」

明石潟……………

紅葉のこき一葉こそ散にけれ
我の子駒の黒髪の上に

註17:「嵐雪の古調」に「古歌の翻案」あり。

(12ばハぎ) 8 鄙丸 ヒナノコトラ 人ラシク云ヒシ也

註12:「和歌と俳句」に「皆な雅趣あらはるはなし」を訂正

「皆な雅趣あらざるはなし」

註8:「有徳なる物汐干の瀉なる大きな鯛 由ト」の句

ウトク

「8」

ガミ

「8」有徳なる物 人ニアラズ「つくも髪」 白髪ニナリシ

ヲいふ



子規口述筆記稿本 1

14鐘一ツ賣れてトル

陽気ニテ 盛也

註8:「宝井其角」に「鐘一ツうれぬ日はなし江戸の春」の句

二百句ハ三百句 二百句

21まねても

好ミテニモアリ

註21:「向井去来」に「去来の句」「二百句」を「三百句」に

「8」左勝(雪ノフクノ方) 「8」鯛□□□□□□□□□□□□

訂正

註8:「雪の純左勝水無月の鯉 芭蕉」の純(フグ)に「雪の吹く方」を説明

註21(21):「向井去来」に「意気凜然」「豪壮」「教晦」「纖巧にして奇創」「神韻縹渺自然に渾成」なるを「まねても」「好みによる」と説明

「8」はへえナリ 「13」四ツ手 16莖立 蕪類ノ正月ニ

用フル一種ノ菜

「18」

動物ハ三分ノ一以上 丈艸ノニハ

16みる房

ミルシケル物

註18:「服部嵐雪」に「扱ぶ所ものは動物にして文章句中に

註16:「服部嵐雪」に「部あけて莖立朝まだき」の「莖立」説明。「ミル」は海松、「シケル」は繁る。

三分の「一」とあり

註16:「服部嵐雪」に「みる房やかかれとてしも寺の尼」の「みる房」説明。

(21) 桜 時鳥 雪 亦十句以上アリ 26椿 時鳥 月

鴨なくや 26 時雨 雪ハ去来同様

鴨等ニアラズ 十句以上アリ

註26:「内藤文章」に「屋根ふきの海をねぢむく時雨哉」の句

あり

十許リ 忙キコト

能ク働クコト

ヲ形容ス

18一斑

猶 ナホ

オホミソカニ家方二三斗

去年運氣ニヨル

蓬萊 吹様

註18:「服部嵐雪」に「其一班」を「其一斑」に朱字にて訂正

杜の花

註18:「服部嵐雪」に「猶き」を「猶ほ」に朱字で訂正

花の杜 穩当ナリ 両三ツ改ムト うたモ此語あり

註…「東花坊支考」に「花の咲く木はいそがしき二月かな」の句を示すか

28 ただもの「偏ラ」

註28…「東花坊支考」に「百合の花ただものあちら向きたがる」の語句説明

臘八 臘月八日 (出山ノ釋迦)

24 非 有ラ「アラ」ノ仮名 □□

「25」 皺 ひまあく ナガクカカルコト

註…「内藤文章」に「ひまあくや蚤の出て行く耳の穴」の句あり

註24…「内藤文章」に「禪味に富むことを心づかぬ者は非るべし」を「有ラザル」に訂正

29 美濃派 (西)

(東花坊)

支考 廬元(——坊) 五竹坊

(里紅)

註29…「東花坊支考」に「美濃派」と朱の注記あり

ミカサツケ

「32」三笠附 何のその 岩をもとほす □□□□

ソバヤ

45 句ノ点イラヌ

註45…「初嵐」に「君が代も二百十日はあれにけり」の付点記

号の意味なきを記す。なお、「初嵐」の標題の下に「(新 聞「日本」解停の時作る)」と朱字にて注記をしている。

48 (女郎花二僧明尊ノ句二出ツ)

又

47 秋艸 尾花 ぐず花 なでし子の花 また 藤袴

朝顔の花

女郎花 萩 (万葉の歌ニヨル) 「

註47…「女郎花」に「秋の七草」あり

「子規口述筆記稿本」裏

56 燈火漸可親 行秋の親しくなりし夜寒哉

註56…「俳諧麓の菜の評」に「行燈もしたし夜長のふみ机」の句あり

句あり

57 其角ノ句……………

註57…「俳諧麓の菜の評」に「山畑や雲ひくあとに蕎麦の花

(其角より来る) 永繼」の句あり

(荷分) 艸の葉や脛(すねミセケチ)の折たるきりぎりす

挟物 小サキ物

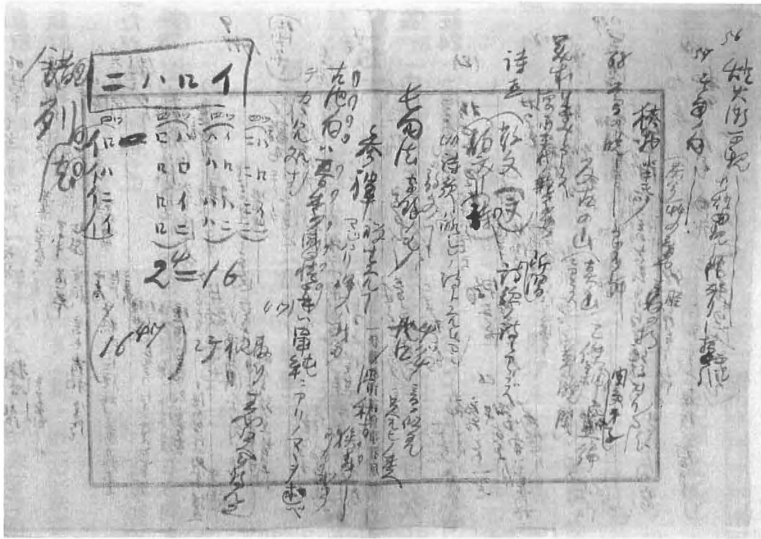
註…「俳諧麓の菜の評」に「白魚とはこよなき鱈の狭物かな」

の句あり

68 鶯の暁…………… 良不解

註68…「発句作法指南の評」に「鶯の晓寒しきりぎりす」の句

あり



子規口述筆記稿本 2

註…鶯の晓寒しきりぎりす(典)(類柑子)(五元集拾遺)。類

句に、鶯の晓かなしきりぎりす(典)(橋立案内志追加)

(橋立案内志追加) 宮津紅筍ノ其角追悼ノ文中ニアリ

關更弟子

反古の山(真ノ山ニアラズ) 三傑集 車蓋編

(蓼 晓 關)

註…「瀨祭書屋俳話増補序」の末尾「明治廿七年四月三十日

に「反古の山のみもとにて 著者しるす」とあり

註…「瀨祭書屋俳話増補序」の本文に「冬の日春の日あら野猿

蓑」に加えて「三傑集蕪村七部集蕪村句集」と説明あり。

美成 成美ニアラズ

徳川末代ノ雑学者

詩想 (散文) (文)

(韻文) (詩) 所謂 詩歌ノ詩ニアラズ

(11) 詩歌ハ咏シシノ詩トスルモヨシ(註、咏未詳)

註11…「芭蕉雑談」の「悪句」に、「其自流(註、蕉風)を開

きたるは僅かに歿時を去る十年の前にして詩想愈々神

に入りたる者は三四年の前なるべし」とあり。「詩想

については、補注として後述する。

歌文ノコト

チグチ

長句法 字餘ノモノ

地口 音ノ似ヨル

口合ヒノ類

滑稽 狹義ノ……………
即カイギヤク

註：「芭蕉雜談」に「俳運亦一変して長句法を用ゐる漢語を雜へ漸くにして貞門の洒落（地口）檀林の滑稽（諧謔）を脱せり。我門弟盛んに之を唱道し我亦此体を厭ふこと漸く甚しきに至りたり」とあり。

參禪

禪坐スルコト

マジハリ釋スノ義カ（註、釋未詳）

註：「芭蕉雜談」の「各句批評」、「古池や蛙飛び込む水の音」の説明中に「參禪」あり。「參禪は諸縁を放捨し万事を休息し善惡を思はず是非に管する莫く心意識の運轉を停めた念想感の測量を止めて作仏を図ること莫れとあり。蕉風の俳諧も亦此意に外ならず、妄想を絶ち名利を斥け（しりぞけ）可否に關せず巧拙を顧みず心を虚にし懷を平にし佳句を得んと執着すること無くして始めて佳句を得べし。」とあり。

古池ノ句ハ春季ノ感情ナキハ單純ニアリノママヲ述ベ
テカ、ハル処ナシ
(17)

註(17)：「芭蕉雜談」の「各句批評」、「古池や蛙飛び込む水の音」の説明あり。「近時西洋流の学者が則ち曰く古池平らかに一蛙躍つて水に入るの音を聞

く、句面一閑静の字を着けずして閑静の意言外に溢る、四隣聞寂（げきせき、物静かなこと）として車馬の紛擾（ふんじょう）、人語の喧囂（けんごう、騒がしいこと）に遠きを知るべし、是れ美辞学に所謂筆を省きて感情を強くなるの法に叶へりと。」と述べて、「感情」の義を説明す。さらに、刪正本には「古池ノ句ニ春季ノ感情ナシ」と朱字にて欄外注記あり。「感情」については、後述する。

錯列法

（数字略）ニテ概数ヲ表ハスヲ得ル也

註：「俳句の前途」に「錯列法」の説明あり。数字は省略する。

「子規口述筆記稿本」の展開を見る。「増補再版 瀬祭書屋俳話」との対比を以下に示す。

「瀬祭書屋俳話」（数字は「日本」掲載順）

俳諧といふ名称（二十五年七月十三日） 10)

○瀬祭の説明「礼記 本ヲ散乱セル状」

連歌と俳諧（七月十二日） 9) ○筑波 (2)

延宝天和貞享の俳風（七月十八日） 11) ○宗因 (5)

足利時代より元禄に至る発句（七月十九日） 12)

○時鳥 (5)

俳書（七月二十三日） 13) 貝おほひ、虚栗 (6)

字余りの句 (九月十一日)	20	○片歌	7/8
俳句の前途 (七月二十五日)	14	○錯列法 (9)	
新題目 (七月三十一日)	15	○猶 (訂正)	13
和歌と俳句 (九月十九日)	25	○ばハざ (訂正)	12
宝井其角 (十月二日)	31	○其角	14
嵐雪の古調 (六月二十八日)	3	○莖立	16
服部嵐雪 (十月三日)	32	○一斑 (訂正)	18
向井去来 (十月九日)	33	○去来の句二百句は三百句	21
内藤文章 (十月十日)	34	○動物	24/26
東花坊支考 (十月十七日)	35	○「ただもの」の説明	28
		美濃派	29
志多野坡 (十月十八日)	36		
武士と俳句 (六月三十日)	5	○三笠附	33
女流と俳句 (七月三日)	6		
元禄の四俳女 (七月四日)	7		
加賀の千代女 (七月六日)	8		
時鳥 (六月二十六日)	1		
扱はあの月がないたか時鳥 (六月二十七日)	2		
時鳥の和歌と俳句 (六月十八日)	4		
初嵐 *未掲載 (新聞「日本」「解停」の時作るとあり、なお、16、19は不収録)		○	45
萩 (九月二十三日)	26		
女郎花 (九月二十四日)	27	○秋草	47/48

芭蕉 (九月二十四日) 28

『俳諧麓の葉』の評 (九月十二日/十七日) 21/24

○燈火漸可親 56 57 68

発句作法指南の評 (八月十日/十月二十日)

17/18、29/30、37/38 加筆 (以下次号)

(註1) 拙稿「子規の「病余漫吟」秋の部の問題」(大阪成

蹊女子短期大学研究紀要」第39号、平成14.3)

拙稿「散策集」について」(「子規会誌」108号、平

成18.1)

(註2) 「子規、俳句観語り記す 記念博物館所蔵資料 愚

陀佛庵での自筆稿」において「大阪成蹊短大 和田氏が

分析 漱石らに自著解説」との見出しで、第八百七回例

会での発表を元にした、「愛媛新聞」二〇一〇年六月一〇

日、渡邊純子記者の報告がある)

子規会誌 第二七号

季刊(四、七、一〇、一月)

発行日 平成二二年一〇月一九日

発行 松山子規会

振替口座 松山市末広町正宗寺内

印刷所 〇一六二〇一七一一八八八

電話 〇八九九二五〇三三八

(有) 二葉印刷所

渡部 ヨシ子

〒791-8013 松山市山越3丁目9番12号 TEL(089) 925-0338
FAX(089) 925-2189

松山を代表する

銘菓「子規」・醤油餅

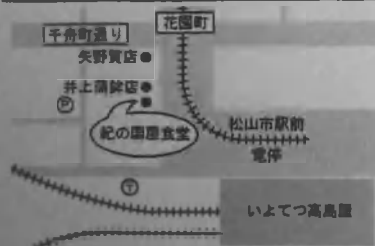
松山市道後湯之町13-7

巴堂本舗

TEL 089 (941) 3452

お食事処・麺処・宴会 (20名様)

紀の国屋食堂



瀬戸内の活き魚料理、
ふぐ会席、猪鍋
※宴会の予約賜ります

松山市湊町5丁目3-5
電話 945-1309
(日曜定休日)

子規のすべてがここに。

子規選集 全15巻セット

定価 58,800円

【編集委員】

粟津則雄／大岡信／長谷川耀／和田克司



四六判 上製・カバー装(各巻368頁～768頁) 定価 3,675円～3,990円 装幀 菊地信義

本選集の特色

- 各界の第一人者によるテーマごとの新しい編集。
- 新字・新かな表記、漢文表記には読みかたを付し、読みやすいかたちで子規の言葉を味わう。
- 写真や図版を多用し、子規の世界を視覚的にとらえられようように工夫した。
- 新出書簡を可能な限り収録し、また新資料により年譜の充実をはかった。
- すべての巻に、人名について注を付す。
- 俳句・短歌の巻には初句索引を付す。

【全15巻内容】

- 第1巻 子規の三大隨筆
- 第2巻 子規の青春
- 第3巻 子規と日本語
- 第4巻 子規の俳句
- 第5巻 子規の短歌
- 第6巻 子規の俳句革新
- 第7巻 子規の短歌革新
- 第8巻 子規と絵画
- 第9巻 子規と漱石
- 第10巻 子規の手紙
- 第11巻 子規の俳句分類
- 第12巻 子規の思い出
- 第13巻 子規の現在
- 第14巻 子規の一生
- 第15巻 子規と詩聞

【発行】株式会社 増進会出版社

〒411-0943 静岡県駿東郡長泉町下土狩105-17
TEL 055-973-7117

Z-KAI
<http://www.zkai.co.jp/>

心を
ゆるめて
ゆつたりと

旬味あふれる会席をたのしみ
あふれる湯にお遊びください。

道後館

愛媛県松山市道後多幸町7-26 〒790-0841 TEL089-941-7777 FAX089-941-7707

予約専用 ☎089-941-7782(8:45～20:00) ☎0120-10-4848(8:45～20:00) <http://www.dogokan.co.jp>

¥400